日本の猫説話からみる日本人と猫の関わり

川越伊織
地域キュレーションコース
説話研究

はじめに

猫は人間にとって身近な動物の代表格である。猫を身近に感じる私自身の体験の中で、時や場合によって猫との関わり方や抱く印象が異なることに気が付いた。このことから日本人が猫とどのような関わりを持ってきたのかについて興味を持ち、研究を行うに至った。さらに、日本人の猫との関わり方や抱く印象が物語の形で語られている説話に着目し、「日本の猫説話からみる人と猫の関わり」とテーマを定めた。本論文では、人間にとって身近な動物である猫と日本人がどのような関わりを持っているのかについて、日本の猫説話から明らかにすることを目的とする。

本論では、猫の性質や習性、人と猫の関係性が話の内容に関わる説話のことを「猫説話」と定義する。そもそも説話とは、神話や伝説、昔話、民話などの語ることで伝えられてきた物語を総称したものである。よって「猫説話」は人々が語ることで伝えられてきた物語であり、その内容に猫の性質や習性、人と猫の関係性が関わっているものであると説明できる。

分類と結果

日本人と猫の関わりを明らかにするため猫説話の分類を行う。収集した猫説話には複数のパターンがあり、各パターンを読み解くことが日本人と猫の関わりを明らかにすることに繋がると考えたためである。分類の手順は、収集した383話の猫説話それぞれから要素を抽出、抽出した要素の集計、要素の集計結果から猫説話全体の傾向を明らかにした後、人と猫の関わりという視点から猫説話を分類、とする。

抽出する要素は「猫が登場するか」「飼い猫か」「人の言葉を話すか」「人のような行動をとるか」「猫の年齢」「猫の様子」「人間の猫に対する心情、行動、考え」の7つとし、これらを分析の方法から上記の前5つの要素をグループⅠ、後2つの要素をグループⅡに分けた。グループⅠからは「猫が登場する場合が一般的で、その猫は飼い猫である。猫は人の言葉を話すことも人のような行動をとることもないただの動物として存在し、年齢不明または老猫であることが多い」という傾向が明らかになった。グループⅡでは人と猫の関わりという視点から、収集した猫説話を「ⅰ人の世界に猫を受け入れる」「ⅱ人の世界から猫を追いだす」「ⅲ人の世界と猫の世界を区別する」の3つ、さらにこれらが重複する場合(ⅳ～ⅵ)とどれにも当てはまらない例外(ⅶ)を含めて7つに分類した。分類結果のⅰ、ⅳ、ⅴから「①日本人は猫について理解したうえで猫との共存を図る」、ⅱ、ⅳ、ⅵから「②猫と人は同程度の強さを持っている」、ⅲ、ⅴ、ⅵから「③人には人の世界があるように、猫には猫の世界がある」が導き出された。

結論

猫説話の分類から人と猫は対等な関係であることが明らかになった。その根拠として「①日本人は猫について理解したうえで猫との共存を図る」「②猫と人は同程度の強さを持っている」「③人には人の世界があるように猫には猫の世界がある」の3点がある。

「①日本人は猫について理解したうえで猫との共存を図る」では、該当する話数の多さから多くの日本人が猫と共に生きてきたことがわかる。さらに該当する説話の内容から、猫に対する嫌悪や恐怖を持っていたとしてもその存在について理解したうえで共存を図ろうという意思が日本人にあることがわかった。「②猫と人は同程度の強さを持っている」では、人と猫は上下関係にあるという人間の慢心を猫から人への報復が覆す動きがみられる。人は強者であり猫は弱者であるという考えを猫が自身の強さを以て否定しているのである。「③人には人の世界があるように、猫には猫の世界がある」では、人の世界とは別に猫の世界が存在すること、そこには人の世界と同様にスキルアップの概念や出世の仕組みがあることがわかった。さらに、猫とは年をとると化けて悪さをする動物であると理解したうえで、人間は人と猫が最大限共に過ごせる方法を選択しているということも明らかになった。

以上のことから、日本人と猫は対等な関係であると言える。

［主要参考文献］
参考1）谷真介『猫の伝説116話：家を出ていった猫は、なぜ、二度と帰ってこないのだろうか？』梟社、2013年
参考2）松谷みよ子『現代民話考10(狼・山犬,猫)』立風書房、1994年

沖縄の重箱

重箱の現状からみる祖先崇拝儀礼の簡略化

桑江可奈子
地域キュレーションコース
文化研究

研究の目的と背景：重箱・祖先崇拝儀礼の現状の追求

本研究は、祖先崇拝の思想が根底にある沖縄の伝統的な儀礼の数々と、それらの儀礼のなかで用いられる伝統食の現状を明らかにすることを目的としたものである。

沖縄は、先祖を祖霊神として信仰する祖先崇拝の風習が今もなお色濃く残っている地域であり、祖先崇拝の思想からなる伝統的な儀礼が数多く存在する。（写真１）しかし、沖縄出身である筆者は、沖縄での生活のなかで、そういった儀礼の数々が時代の流れとともに省略・簡略化されている様子を目の当たりにし、次第に沖縄の伝統的な儀礼の現状を明らかにしたいと考えるようになった。そこで筆者は、多くの儀礼のなかで用いられる沖縄の伝統食「重箱」に着目した。（写真２）儀礼のなかで用意され、皆で食される食事、「重箱」に関しては、儀礼の要素として省略がなされにくく、変化が起こった部分については非常に分かりやすく観測できるものであるため、重箱について研究することは、儀礼の現状を明らかにするための足掛かりとなると考えたからである。本論では、祖先崇拝の思想に基づいて行われる伝統的な儀礼を総称して「祖先崇拝儀礼」とし、重箱の現状やそれらに対する県民の意識について探ることで、現代の沖縄における祖先崇拝儀礼の在り方を明らかにしている。

写真１）祖先崇拝儀礼の様子（桑江可奈子撮影 2017年5月）

写真２）沖縄の重箱（桑江可奈子撮影撮影 2017年5月）

調査の概要

まず、重箱の現状を知るために、重箱を商品として取り扱かっている県内の店舗に対して調査を行った。大手食料品店4社の重箱の販売の様子からは、季節商品としての重箱と、これまでの伝統的な重箱との明確な違いが明らかとなり、また、長年重箱を取り扱ってきた総合商店のオーナーに対して行ったインタビューからは、祖先崇拝儀礼に対する県民の意識や県内の重箱需要が、かつてと比べて減少している現状を窺い知ることができた。

さらに、重箱や祖先崇拝儀礼に対する県民の意識を明らかにするため、沖縄出身かつ現在も沖縄で生活している方を対象とし、アンケート調査とインタビュー調査を行った。この調査からは、世代が若くなるにつれて、重箱や祖先崇拝儀礼に関する意識が薄弱なものとなっていることや、世代間に大きなギャップがある現状などが浮き彫りとなった。

まとめ：沖縄の重箱・祖先崇拝儀礼の現状と今後

これらの調査から、重箱が現代人の味覚やライフスタイルと乖離するものとなってきており、そのギャップを埋めるため、重箱を外部から購入したり、現代的な食事で代替したりといった簡略化がなされ、さらに、伝統が消失したことによる重箱の定型化も生じている現状が明らかとなった。また、祖先崇拝儀礼において重箱を用いるという形式は今もなお継承されているものの、重箱の根底にある先祖崇拝の思想は世代が若くなるにつれて薄弱なものとなっており、高齢者層は家庭内の重箱に関して強い権限を持っていることが窺えた。

重箱は祖先崇拝儀礼を構成する要素の一つであるため、重箱に対して影響力を持つ高齢者層は、儀礼全体に対しても同様であると考えられる。また、重箱の簡略化に伴い、祖先崇拝儀礼自体も簡略化してきており、メジャーではない祖先崇拝儀礼は、簡略化はおろか日常のなかから省略されている現状が明らかとなった。

世代が若くなるにつれ、祖先崇拝儀礼に対する熱量も下がっているようであったが、若年層が祖先崇拝の思想を持ち合わせていないわけではない。若年層の祖先崇拝・祖先崇拝儀礼への熱量の低さは、それらに関する知識の少なさが起因していると考えられる。

未だ一定の需要がある重箱であるが、今後その需要が高まるとは考えにくい。時代に合わせた重箱のかたちを模索していくことで、重箱の未来は広がり、結果的に祖先崇拝儀礼の簡略化を抑えることにつながるだろう。

［主要参考文献］

参考１）田原美和、森山克子、東盛キヨ子、金城須美子/「沖縄の清明祭の行事食の現状と伝承に関する一考察」/『日本調理科学会誌』/48巻１号/pp49-56
参考２）渡口初美/『渡口初美の琉球の家庭祭祀−年中行事・先祖供養・伝統料理−』/沖縄教育プロダクション/2013

放生津八幡宮秋季大祭の現状と課題

槙玲奈
地域キュレーションコース
文化研究

研究目的

本論文では、放生津八幡宮秋季大祭の現状と課題と題して、近年感じられる新湊曳山まつりや、築山行事・宵祭り、祭礼中の家庭の様子の変化から現状を見つめ、課題を探すことをテーマに論じていく。

放生津八幡宮秋季大祭は9月30日から10月3日までの4日間にわたり行われる放生津八幡宮の行事である。9月30日に魂迎式、築山祭、前夜祭、入魂式、10月1日に神輿渡御、曳山巡行、10月2日に例大祭、放生会式、築山飾、10月3日に報賽祭が執り行われる。

現状

曳山まつりを神事としてではなくイベントとして捉えて参加している者がいることや、巡行に観光的配慮がなされていること、曳山や衣装の装飾化から、元来神賑行事であった曳山巡行のイベント化が進んでいる。

その他の行事から宵祭りと築山行事を取り上げる。9月30日の夕刻を指す宵祭りでは観光客向けのアトラクションを用意している曳山町によって秋季大祭への高まりを演出するも、祭りの雰囲気の演出に効果が期待できる提灯は高齢化により設置が減っている。築山祭と築山飾を総称した築山行事は、2020年に国の重要無形民俗文化財に登録された。築山飾は氏子の参詣参拝が求められるが、氏子の興味関心が薄く足を運ぶ人が少ないのが現状である。

祭礼日変更当時の大正11（1922）年には親戚を呼びもてなしていたというが最近の町の様子として親戚を呼んでいる家庭は少ない。また、家で作っていた御膳を仕出しでまかなうようになっていたが、店に入る注文の大半も現在はオードブルになったという。最も多く聞かれたもてなし喪失の原因はもてなす側の高齢化と、親戚付き合いの減少であった。一方で今でも親戚が祭りの際に訪れている家庭からは、現在は呼んでもてなすというよりも祭りが好きだという親戚が遊びに来るため魚や煮物を用意する程度になったという。

課題

新湊曳山祭りはイベント化を是正し、神様の存在が消えただのイベントとならないようブレーキをかけていくことが今後必要となる。

宵祭りと築山飾の課題として、宵祭りでは、提灯によって氏子、アトラクションによって観光客の双方に秋季大祭を感じてもらうことを期待し、地域を巻き込んだ雰囲気づくりが課題であり、築山行事は氏子に行事の存在や概要を知ってもらい、神様と氏子が交歓する場の創出が求められている。

各家庭のしきたりは社会の変化によって失われていったものであるため、時代に逆らって過去の様子に戻すことを無理に強いることではない。しかし、用意していた料理の記憶や親戚同士が集まっていた様子を過去の記録でとどめないための工夫と、家庭の味というものが失われないための工夫が必要であることが課題としてあげられる。それに加え、しきたりが変化したことにより影響を受けている地域の飲食店の祭礼時の営業を見直し、観光客が秋季大祭と同時に近年観光地となった新湊を楽しんでもらい、秋季大祭を活用して商工を活性化させることも今後考えてまちづくりがなされることを期待する。

図1　我が家での過去のもてなしの様子

9月30日	魂迎式 築山祭 前夜祭 （入魂式）
10月1日	神輿渡御 曳山巡行
10月2日	例大祭 放生会式 築山飾
10月3日	報賽祭

図2　放生津八幡宮秋季大祭式次第

図3　曳山巡行の様子（左：花山、右：提灯山）

【主要参考文献】
射水市教育委員会／『放生津八幡宮祭　曳山行事・築山行事総合調査報告書』／射水市教育委員会／2020

岩瀬曳山車祭に対する岩瀬の人々の意識変化

飯野采美
地域キュレーションコース
文化研究

はじめに

新型コロナウイルスの影響によって２年間途絶えた岩瀬曳山車祭であったが、コロナ禍3年目の2022年度は２年ぶりに祭りが行われることとなった。しかし、今年行われた岩瀬曳山車祭は例年のルールと異なり、新型コロナウイルスの影響により、変則的なルールの下で行われた。岩瀬曳山車祭という地域行事を通じて地域間交流があった岩瀬の人々にとって、２年ぶりの開催となった岩瀬曳山車祭に対し、何らかの意識変化があったと推測する。

本研究では、コロナ禍において行われた岩瀬曳山車祭の実態を調査し、岩瀬曳山車祭に参加した新町の人々が岩瀬曳山車祭に対し、どのような意識を持っているのかを明らかにすることを目的とする。研究方法として、2022年度の岩瀬曳山車祭に参加する新町に協力を得て、祭りの準備段階から、祭り当日、片付けの期間に参与観察とインタビュー調査を行った。

岩瀬曳山車祭について

岩瀬曳山車祭とは、富山市岩瀬地区にて約220年以上行われている祭りである。この祭りは、筆者が幼い頃から携わっている祭りだ。諏訪神社の春季例大祭として、毎年5月16日から3日間行われている。昼間には11基の山車が町中を曳き廻し、17日と18日の夜には山車同士が激しくぶつかり合い互いの力を比べる“けんか山車”が行われる。

調査結果と考察

調査の結果、コロナ禍において行われた祭りでは、新型コロナウイルスの影響によって対応策がなされており、例年と異なった岩瀬曳山車祭が行われていたことが分かった。また、コロナ禍にて行われる岩瀬曳山車祭への参加に対し、新町では新型コロナウイルスの影響を恐れる反対派の町民と伝統を繋いでいきたいという想いを持つ肯定派の町民による意見の対立が見受けられた。しかし、次世代に繋げる祭りにするという目標に反対派の町民が理解を示し、祭りへの参加を肯定する意見へと変化し、町民の間で意識改革が起きていた。そして、今年行われた岩瀬曳山車祭を通じて、新町の人々は保育園児たちを含む若い世代に引き継ぐことや今年参加できなかった町内に良い働きかけを行えたこと、地域の人の喜びを実感したことにより、満足感を得られていたことが明らかとなった。

インタビュー調査を通して、祭りにおける“繋がり”とはどのようなものを指しているのかについて着目すると、祭りとは多くの人々が集い、各々の役割を担う中で交流を通して自然と人と人が“繋がる”ことができる場となっていると考察できる。

また、祭りを通して繋がるのは、人間関係だけではなく、祭りを通して礼儀を学ぶことによって、社会や地域に“繋がる”ものだと認識されていることが分かった。加えて調査では、今年度の新町の参加者は”繋がる”という受動的な意識から、“次世代に繋げる”、“来年へと繋げる”という自発的に“繋げていく”能動的な考え方へと意識が変化していた。また、祭りを繋げるために、祭りを通じて知り合った人と人との繋がり途切れないように人間関係を“繋ぎ続けている”ことを重視していた。

以上のことから、新町の人々にとって岩瀬曳山車祭は、各々の役割を通じて人と人とが世代間を超えて繋がる受動的な場となっていたが、今年度の岩瀬曳山車祭を通じて、来年や次世代へと“繋げる”もの、人間関係を“繋ぎ続ける”ものという能動的な考え方へと変化していたと言える。

おわりに

祭りは3世代が交流できる場であり、地域の人々が世代間を超えて繋がる機会となっている。また、祭りを通して、人間関係を築いていく中で礼儀を学びながら地域や社会にも繋がるという、受動的なものがあった。しかし、年に１度行われる祭りを通じて地域の人々が交流できる場が新型コロナウイルスの影響により、2年間喪失されたことが新町の人々にとって、当たり前として捉えていた祭りを再考するきっかけであったと考える。そして、今年度の岩瀬曳山車祭に参加していた新町の人々は、祭りは“繋がる”ものという意識を持ちながら、祭りを“繋げる”という能動的な考え方へと変化したのである。この意識変化は新町の人々にとって、岩瀬曳山車祭の周期性を取り戻すための地域のレジリエンス力として、次に“繋げる”祭りとして役割を担ったと考える。

写真）岩瀬曳山車祭の様子/筆者撮影

［主要参考文献］
参考１）清水幸一／『岩瀬曳山車祭』／岩瀬曳山車祭調査会1992年
参考２）池上紀代／「岩瀬の曳山車」／富山大学人文学部文化人類学研究室編『岩瀬の曳山（地域社会の文化人類学的調査）／富山大学人文学部文化人類学研究室／1991年／p.6、pp.23-25、p.27

和太鼓演奏の正しさ

家田彩未
地域キュレーションコース
文化研究

序章

本論文では和太鼓演奏の正しさを構成する要素を抽出することを目的とする。和太鼓演奏とは、小口大八氏が創始した、和太鼓が主眼でかつ複数異種の太鼓を使用し、大編成で演奏を行う演奏形式のことである。また、和太鼓演奏において、揃うはずのリズムやテンポが揃わないと、不一致が生じ音楽として成り立たず、雑音と化してしまう。そのため、和太鼓演奏は、上手いか下手かではなく、正しいか間違っているかで判断されることがしばしば見受けられる。そのため、本論文では、和太鼓演奏の上手さではなく正しさと表記する。

第1章　和太鼓演奏の概要

第1節では和太鼓演奏で使用される和太鼓の種類について取り上げた。和太鼓は日本の芸能で使用される皮膜が張られた楽器の総称であり、和太鼓演奏でも使用される。しかし、和太鼓の分類は複数存在し、定義づけが異なる。これらの分類の整理を行った結果、「太鼓類」「鼓類」で分類する場合、和太鼓は原則両手に持ったバチで打つものであるため「太鼓類」に属することがわかった。種目ごとの分類では、古くからある雅楽などの種目と異なり、和太鼓演奏では使用する和太鼓の種類が固定されていないため、分類することが困難なことがわかった。

第2節では和太鼓の打ち方に焦点をあてた。打ち方についても整理を行った結果、和太鼓演奏を行う上で、演奏者は全身を駆使した打ち方を身につける必要があるということがわかった。全身を使うことで、芯のある音はもちろん、視覚的にも楽しめるパフォーマンスに繋がるため、必要不可欠なのである。

第2章　小口大八の和太鼓論とその要点

和太鼓演奏の祖・小口大八氏が提唱した和太鼓論「鼓道十訓」と「鼓道入門」を中心に要点の調査を行い、小口氏にとって正しい和太鼓演奏を構成する要素とは何か、考察を行った。「鼓道十訓」では、小口氏は基本的な和太鼓の打ち方と、リズム、テンポを含む「基本リズム」を重視し、演奏者が全身全霊で熱意をもった演奏を行うことで生み出される「音の迫力」も重視している。「鼓道入門」では、「人づくり」が重要とされ、「日常一般の常識を身につけ、行える人間になる」ことで、演奏の調和にもつながると述べる。以上のことから、小口氏にとって和太鼓演奏の正しさを構成する要素は①「基本リズム」の習得、②打ち方の習得、③他者との調和、④熱意をもった演奏の4つである。

第3章　中学・高等学校和太鼓部における要点

ある中高一貫校の和太鼓部を例に要点の調査を行い、和太鼓部にとって正しい和太鼓演奏を構成する要素とは何であるか、考察を行った。演奏会出演後のアンケートでは、打ち方に加え、礼儀や思いやりの気持ちを持つことが必要とされていた。加えて「演目テスト」では、演目ごとに演奏の指針があり、それに準じて習得度が図られていた。また資料整理を行う中で、和太鼓部において打ち方などを習得し、挨拶などの礼儀が備ることで、和太鼓演奏の調和に繋がると推測した。以上から、①リズム・テンポの習得、②打ち方の習得、③他者との調和、④揃った演奏の4項目が和太鼓部で行われる和太鼓演奏の正しさを構成する要素である。

第4章　和太鼓演奏の要点―《天くう》を中心に

愛知県瀬戸市の和太鼓団体《和太鼓 天くう》の調査を通じて、《和太鼓 天くう》にとって正しい和太鼓演奏を構成する要素とは何か、考察を行った。結果《和太鼓 天くう》は、リズムの強弱などに注意し、メリハリのある演奏を行うという特徴があった。また、他者とコミュニケーションを頻繁にとっていることも特徴の1つである。加えて、打ち方が綺麗であることや揃っていることよりも、楽しそうにみえることや情熱を感じる演奏を好む傾向にあった。以上から、①強弱等メリハリのある演奏、②打ち方の習得、③他者との調和、④情熱が、《和太鼓 天くう》にとって、和太鼓演奏の正しさを構成する要素である。

第5章　考察

以上の結果を踏まえ、要点を比較し、考察を行った。①リズム・テンポの習得、②打ち方の習得、③他者との調和はいずれの演奏者、演奏団体にも共通しており、4つ目のみ打ち方やリズムなどの揃いを重視するか、気持ちを重視するかで差異が生じた。どちらがより和太鼓演奏の正しさに繋がるか考察した結果、どちらも誤りではなく過程の違いではあるが、観客、演奏者ともに充実感が持てるのは熱意をきっかけとした演奏であると結論づけた。以上の考察から、和太鼓演奏の正しさは、①リズム・テンポの習得、②打ち方の習得、③他者との調和、④熱意を持った演奏、の4つの要素を含んでいる。

終章

以上の調査を経て、和太鼓演奏の正しさについて考察し、結論づけたが、知見を広げることで和太鼓の正しさに関する考察も発展すると考える。今後も《和太鼓　天くう》に関与しつつ、知見を広げていく。

［主要参考文献、引用文献］
小口大八／『天鼓―小口大八の日本太鼓論―』／長野：銀河書房／1984年

伝統芸能の普及活動に関する考察
須磨琴保存会を例に

福嶋純之
地域キュレーションコース
文化研究

序章

2020年1月から流行した新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）により、演奏会の延期や中止、注文が途絶えた楽器製造会社の廃業など伝統芸能を始めとする文化芸術活動に大きな影響を与えた。しかしイベントでの感染防止対策の徹底やインターネットを活用した活動、行政による支援策などコロナ禍でも可能な伝統芸能の普及活動を実施している。本論文では兵庫県の無形文化遺産である須磨琴と須磨琴保存会に焦点を当て、「須磨琴がどのような性質を持ち普及したのか」ということを歴史的変遷から明らかにし、コロナ社会や今後の普及活動を考察する。

第1章　須磨琴について

須磨琴とは1枚の板に絃を1本だけ張ったシンプルな構造の楽器であり、幽玄さを持った音色が特徴である。一般的な名称は「一絃琴」だが、平安時代の貴族在原行平が須磨に流された際、自らの寂しさを慰めるために舟板と冠の緒で製作したという伝説からこの名前がついた。

須磨琴の起源は諸説あるが、現在の須磨琴の歴史は江戸時代に覚峰が須磨琴を再興したことから始まり、その後幕末から明治にかけて真鍋豊平によって全国的に普及した。当時須磨琴は精神修養の道具として文人墨客に愛され、また須磨琴の曲の歌詞には古典文学や催馬楽などを用いたものが多かったことから、神道の提唱や復古主義を唱える国学者や勤皇の志士の間でも須磨琴は受け入れられていった。明治維新以降は復古思想の衰退や西洋音楽の輸入によって徐々に衰退していった。

第2章　須磨琴保存会について

須磨琴保存会は1960年に上野山福祥寺（須磨寺）を拠点に発足した須磨琴の保存団体である。須磨琴保存会はただ須磨琴を保存伝承するだけでなく、これまでの精神修養や王政復古といった思想と切り離した音楽としての確立を目指してその演奏技術の向上に努めながら、須磨琴教室や演奏会、出張授業など様々な普及活動をしている。

須磨琴保存会の普及活動には大きく3つの要素が含まれている。1つ目は須磨琴の技や表現、歴史などを後世へ伝える「伝承」、2つ目は須磨琴を媒介とした他者との交流によって須磨琴について認知してもらう「交流」、最後に須磨琴という楽器そのものを対外的に認知してもらう「広報」である。兵庫県内の中高生に対して須磨琴の認知度が低いことと、会員の多くは趣味や習い事の一環として須磨琴を演奏する人が多いことから、須磨琴保存会では「伝承」「交流」に重点を置いた普及活動をしており、「広報」の要素は十分ではないと考える。

第3章　コロナ社会での須磨琴保存会

新型コロナの影響を受け、須磨琴保存会の演奏会が中止になり、須磨琴教室は緊急事態宣言が解除された後も感染対策を講じた稽古方法に変化した。この状況を打破すべく、多くの伝統芸能団体がインターネットを活用した普及活動や行政による給付金の配布、普及事業や公演の支援事業が行われた。須磨琴保存会では新たに2つの事業を行った。

1つは「須磨琴たより」の発行である。会員同士の情報共有を目的として2020年12月から配布され、須磨琴教室の情報や演奏スケジュール、連絡事項などが記載されている。対面接触の困難になった会員同士による「交流」を維持することができる。

2つ目はYouTubeでの動画配信である。文化庁による「文化芸術収益力強化事業」の一環で、須磨琴の歴史や文化、楽器紹介、最高師範の小池美代子による演奏方法のレクチャー動画、会員による演奏動画などの映像を全12本製作し、2021年2月8日から12日間連続で『須磨寺小池陽人の随想録』というYouTubeチャンネルにて配信を行った。保存会員にとって須磨琴教室で稽古が受けられない間、演奏のお手本として活用できるため「伝承」につながっている。また須磨琴を知らない人には須磨琴について世界的に認知してもらう機会を得ることができ、「広報」活動を充実させたといえる。

終章

須磨琴は時代の風潮に合わせてその楽器の持つ意味を変化させながら普及されてきた。伝統芸能の活動では歴史や伝統を後世に継承するだけでなく、これまで培った歴史や技術、表現をもとに新たな試みにも挑戦していくことや、一般に活動を認知してもらうこともまた重要である。

今後の須磨琴保存会はこれまで通り須磨琴の演奏や活動を守り、繋いでいくために「伝承」と「交流」を中心に神戸市でしっかり基盤を築くと同時に、須磨琴について広く知ってもらうための「広報」にも力を注ぐべきである。「広報」によって興味を持った人々と会員たちが「交流」を深めて、「伝承」へと繋がっていければよいと考える。

［主要参考文献］
参考1）須磨琴保存会／須磨琴／大本山須磨寺／1986
参考2）須磨琴保存会／兵庫県無形文化財　須磨琴　須磨琴保存会五十年のあゆみ／須磨琴保存会／2015

町家の密接する壁に見る町家社会の人間関係

高岡市中心市街地を例に

松延玄甫
芸術文化キュレーションコース
文化研究

高岡市にはかつての隣家の跡が残る壁がある。その壁からはその隣家の姿形が想像できる(図1)。これを独自に「元お隣さんの面影」と呼び、この現象から本研究は出発している。

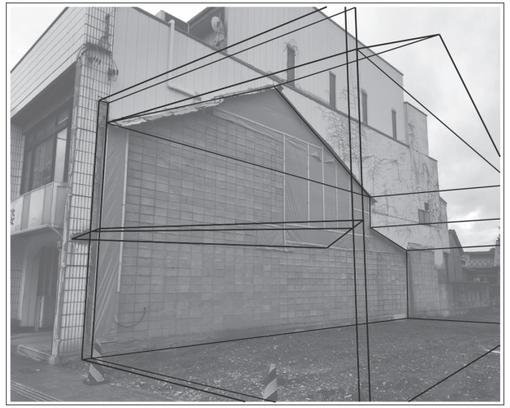
本研究では町家を「軒を連ねた一戸建て家屋」と定義している。調査地である高岡市の町家と言えば山町筋の「土蔵造りの町家」、金屋町の「千本格子の町家」などが特徴的であるが、その周辺にも「トタンや鋼板による外装の町家」が多く見られる。この「トタンや鋼板による外装の町家」のほとんど、そして前者二者の特徴の町家の一部は隣家と互いの壁を密接させている。こうした密接する町家は互いに独立した柱と壁を持ち、実際には互いの壁の間に数センチから数十センチ程の隙間を持つことがあるのだが、極度に接近し、壁上部で雨の侵入を防ぐことで側面の壁の密接部分において外装を省略している。これを文中では「密接する壁」と表現する(図2)。「元お隣さんの面影」はこの構造に由来する。本研究では、この壁と町家社会の相互関係、すなわち町家の壁の社会的な意味を明らかにする。そのために「町家の取り壊し」に注目し、そこでの町家住人の思考・行為から町家社会の人間関係と壁との関係を抽出し、町家の壁の社会的な意味としてまとめる。

町家の密接する壁と町家の取り壊しには特殊な関係がある。それは町家の取り壊しにおいて、町家の密接する壁が省略している外装を新設するための「隣家の壁の補修費用」を発生させることである。さらには、その費用の負担における決まりがない。そこで町家の住人は、普段は「ただの壁」として認識している壁を、取り壊しにおいては「密接する壁」として認識する。そこで、この「隣家の壁の補修費用」の負担をどのように決定するのか、町家の住人、町家の取り壊しを行う施工業者、行政に対して町家の取り壊しのプロセス調査、及び事例収集を行った。そこではこの費用が住人によって「話し合い」と表現される方法で解決されていることが明らかになった。ところが、この「話し合い」には　行為上の定型がなく、中には「提案」や「報告」のように一方的なものもあった。こうした多様性のある行為の中で、取り壊しの当事者は隣家住人との「これまでの関わり」や「これから関わる可能性」に配慮している。その結果、当事者が費用の少なくとも必要最低限を負担している事例が目立つ。この隣人関係への配慮や費用負担の結果は、行政から得た「一般的な見解では権利や義務の視点から残る隣家が負担する」という回答とは大きく異なる。費用を負担した当事者もそうした権利・義務による主張を心の内に持っていたが、隣家住人との良好な関係性を維持するために抑制していた。他方では、隣家住人との関わりがない場合に「話し合い」が行われない「壊し逃げ」の事例があった。つまり、「話し合い」とは権利・義務や金銭の問題ではなく、町家の取り壊しにおける隣家住人との人間関係の問題を解決するものである。

こうして町家の取り壊しにおいて取り壊しの当事者が隣家住人との人間関係に配慮することは、先代や知人、業者から教えられ慣習化されている。ところが、この慣習は空き家率の上昇や人口の流出を受けて隣家住人との関係性が希薄化することで継承・機能しなくなってきている。その結果として、現在の高岡市中心市街地では「補修されない」町家が発生するようになり、この時隣家の壁はブルーシートで補修される。

「密接する壁」の社会的な意味とはここまで述べたように隣家の壁の補修費用を意識させることで町家社会における隣家住人との配慮に基づく人間関係を形成することである。この人間関係は社会学者である井森陸平が唱える「居住する土地を基礎とする社会関係」とも捉えられる。厳密には、町家社会においては「密接する壁を基礎とする人間関係」であるが、土地を意識させる点において類似する。井森は都市ではこうした土地を意識する人間関係を持たないとしている。つまり、第3章で述べたように、現在の町家社会においてこの人間関係が十分に継承・機能しなくなっていることは町家社会がより都会的な社会へと変化していることを意味する。また、この変化は町家が取り壊されゆく町家社会、高岡市中心市街地において隣家の壁のブルーシートによって景観に現れることがある。町家の密接する壁からは、こうして町家社会の人間関係や、その変化を垣間見ることができるのだ。

[主要引用文献、参考文献、URL]
・井森陸平、1944『都市と農村』東京：時代社、4、2、438頁
・上田篤、1975「町家論」上田篤、土屋敦夫著『町家・共同研究』東京：鹿島出版会、11～100頁



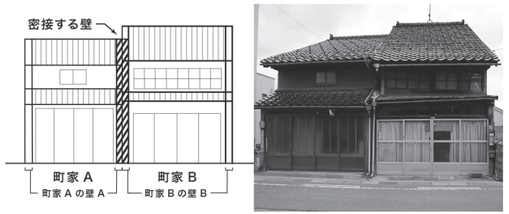


図1(上)：「元お隣さんの面影」とその跡から想像されるかつての隣家。
図2(下)：「密接する壁」の模式図(左)とその実際の様子(右)。どちらの町家も柱、壁を持つ。